

春愁しゅんしゅうの ブラームス

市民響 × 田部井剛

府中市民交響楽団

Tsuyoshi Tabei · 指揮

ブラームス 悲劇的序曲 作品81

J.Brahms : Tragic Overture Op.81

R.シュトラウス 交響詩「死と変容」 作品24

R.Strauss : Death and Transfiguration Op.24

ブラームス 交響曲 第3番 へ長調 作品90

J.Brahms : Symphony No.3 in F Major Op.90

2018年

5月20日(日)

13:30 開場 / 14:00 開演

14:00 start, Sunday, May 20th, 2018 at Fuchu-no-Mori Theater "Dream Hall"

府中の森芸術劇場 どりーむホール

全席自由 前売1,200円 / 当日1,500円

*小学校入学前のお子様のご入場はご遠慮下さい。

*当回では点字チラシとプログラムをご用意しております。詳細はホームページをご覧ください。

お問い合わせ：ハーモニージャパン 03-3409-3345 / 大橋康廣 042-368-6180 / info@fuchu-cso.org

チケット取扱：チケットぴあ 0570-02-9999 【Pコード：108-066】

主催：府中市民交響楽団 <http://www.fuchu-cso.org/> 後援：府中市 協力：点訳ボランティアてまり





photo
井利重人

指揮

Tsuyoshi Tabei

田部井剛

早稲田大学商学部卒業。東京音楽大学指揮科研究生修了、東京芸術大学指揮科卒業。これまでに指揮法を遠藤雅古、神宮章、武藤英明、佐藤功太郎、ジェームズ・ロックハート、広上淳一、三石精一の各氏に、ピアノを岩津章子、秦はるひ、藤田雅の諸氏に師事。沖縄国際音楽祭出演。東京芸大在学中にはレハールのオペレッタ「メリーウイドウ」を全曲指揮。1999年には日本フィルハーモニー交響楽団にて巨匠エリック・ハイドシェック氏とマルセル・テラノワ作曲「5月の協奏曲」を協演・指揮（日本初演）。ソリストであるハイドシェック氏は、田部井の読譜能力の高さ、また叙情的でリズムに溢れた演奏に対し、「ヤング・トスカニーニ」と讃えた。2002年には「モーツァルト名曲コンサート」にて再びハイドシェック氏と共演、新日本フィルハーモニー交響楽団を指揮。青柳いづみ著「ピアニストがみたピアニスト」〈Pianistes vus par pianiste〉（白水社刊）では、そこでの協奏曲における絶妙な指揮ぶりについて著述されている。最近では室内合奏団「カメラータ・ジオン」(Camerata Jion) を結成し、ヴァイオリニスト川島成道、チェリスト青木十良の諸氏と共演するなど積極的な活動をしている。2005年にはハイドシェック夫妻との国内ツアーを成功させ話題を呼んだ。そのライブ録音が仏アンテグラル社（Integral Classics France INT 221.156）よりリリースされている。また、漆原啓子、永井和子、佐々木典子、カテリーナショット、宗次郎、クミコ、岡本知高、江戸家子猫、谷川俊太郎などジャンルを問わず内外の様々なアーティストと共演し、高い信頼が寄せられている。オペラの分野においては、團伊玖磨『ちゃんちき』、モーツァルト『フィガロの結婚』、『魔笛』など指揮し、高い評価を得た。このほか群馬交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティフィルハーモニック管弦楽団、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、東京佼成ウインドオーケストラ等を指揮。2006年にはチェコの名門、ターリヒ室内管を指揮し、モーツァルトの交響曲をレコーディング、そのCDがキングインターナショナルよりリリースされている（STUDIO FLORA B-2704）。2010年には日本フィルハーモニー交響楽団にて文化庁主催公演（計9公演）を指揮した。2012年より桐蔭学園「第九の会」音楽監督を務める。2013年には伝説のチェリストと謳われる、クリスティーン・ワレフスカ女史とドボルジャークのチェロ協奏曲を共演、カメラータ・ジオンを指揮、氏より「偉大な才能」と高く評価された。また、ピアニストとしても非凡な能力を発揮し、ウィーンフィル首席チェロ奏者フリッツ・ドレシャル（Fritz Dolezal）、上村昇、勝部太、寺谷千枝子、平松英子諸氏と共演している。2009年には白土文雄（チューリッヒ・トーンハレ元首席コントラバス奏者）のレコーディングにチェンバロ奏者として参加、Harmony社より「モノログ」がリリースされた（HCC 2049）。2012年にはドビュッシー生誕150周年に際し、浜離宮朝日ホールにて行われた、文学キャバレ「黒猫」とその仲間たち、また、カワイコンサートサロン「パウゼ」にて行われたドビュッシーフェスティバル2012に出演、青柳いづみ氏と連弾曲を演奏、好評を博した。2013年には再び白土文雄とのデュオアルバム「Basso d'Amore」をOpus 55よりリリースし、稀有な室内楽奏者としての高い評価がなされている（OPFF-10019）。2009年、上毛芸術文化賞受賞。

ブラームスの残した4つの交響曲 — それぞれブラ^イ1、ブラ^二2、ブラ^三3、ブラ^四4、と呼ばれることが多いが — よく「一番好みはどれか？」という話題になる。私はきまって「弾くならばブラ1、聴くならばブラ4」と答えることにしている。では今回演奏するブラ3（交響曲第3番）は？強いて表現するならば「大好きだけれど難しすぎる曲」だろうか。

ブラ3を知らないチェロ奏者はいないほど、第3楽章冒頭のチェロは有名な。美しく切なく、とか、極めてロマンチック、などと表現されるその旋律を弾くとき、指揮者には「もっと泣けるような音色で！」と指導どころかむしろ切願されるのであるが、いやいや、あまりの難しさに心の中では（家で練習するときも）リアルに号泣である。こんなにも素敵なメロディが目の前にあるのに、自分の力量のなさったら…こんなチェロの音じゃないだろう… ああ時間が足りない… 才能もない… いっそ弾きたくない… とグルグル悩むことは必至である。同じ旋律はその後、ヴァイオリン、フルート、オーボエ、ホルンへと引き継がれていくのだが、みんなチェロほど悩んでいないように見えるのは、気のせいだろうか…。

ブラームスがこのブラ3を完成させたのは50歳の時。20年以上かけ苦労して生み出したブラ1（交響曲第1番）とは違い、ブラ2（第2番）完成のあと約6年で仕上げている。第1楽章は不穏な和音に始まり、ヴァイオリンが甲高く叫ぶ。続く優しいメロディも束の間、どこか不安な要素はどこまでも続き、金管楽器と弦楽器の大暴れの後、嵐が去ったかのように静かに幕を閉じる。穏やかな第2楽章、ゆっくり進むクラリネットに、弦楽器が相づちを打つ。木管楽器と弦楽器の対話は次々と繰り返され、ここはゆったりしていただく時間。ああ思い出した、ここにもひとつ、チェロ泣かせのメロディが……要練習。そして問題の第3楽章を挟んで、終楽章。静けさの中から、またしても不穏な空気は徐々にパワーアップし、総出の金管楽器と大暴れの弦楽器。次第に落ち着いて、めずらしくヴィオラの切ない旋律が聞こえてきたなと思ったらそろそろ終盤、最後は静寂の中に戻ってゆく。

そう、ブラ3のもうひとつの大きな特徴は「全ての楽章が静かに終わる」ことである。これはブラームスの他の交響曲にも、ベートーヴェンの全交響曲にも見られない。「最後は、ジャン！と弾かないと終わった気がしない」という意見も聞いたことがあるが、いかがなものか…。

泣きの第3楽章を象徴としたこの交響曲に組み合わせて演奏するのは、同じくブラームス作曲、**悲劇的序曲**。題名通り、衝撃的で悲痛な主題で始まる15分たらずの曲は、3年後に発表されるブラ3と通じる要素も多々感じられる。

そしてもう一曲、R.シュトラウス作曲、**交響詩「死と変容」**。タイトルからして、さらに暗い。若くして病弱だった作者が「死の恐怖は最初は安らぎへと変わり…」と歌った曲である。瀕死の病人の鼓動を表すティンパニ、人生を回想するオーボエやソロ・ヴァイオリン、一転して病魔との壮絶な闘いとなるが、やがて「変容」していくクライマックスはゾクゾクが止まらない。ちなみにR.シュトラウスの楽譜はこれまた弦楽器泣かせ。聴く分には美しく華やかで名曲揃いなのだが、なぜそんなところまで…と唸りたくなる高い音や、なぜそんな無茶を…と頭をかかえたくなる難しいパッセージが必ず、そして少なからずある。この曲も例に漏れず…。

春の愁いにブラームスはいかがでしょうか。
府中の森へどうぞお出かけください。